

# 海外生活の思い出

本田 正伸 (1969 年卒)



## 1. 学生時代

3回生の時に同級生の石井君と初めてインドネシアを訪問。行きは神戸港から仏の貨客船で渡航しました。2週間のバリ滞在やジャワ島のボドブドゥールやバンドン周辺を周遊し、空路で帰国。学生時の初めての海外旅行は今も鮮明に記憶に残っています。

2. 就活は語科指定の丸紅の面接を受け、夕刻には合格通知が来ました。入社後、船積担当からスタート。当時日本の織物輸出は活況を極めており、月に1日の休み、連日深夜までの残業で、収入は初任給(3万1千円)の倍以上になりました。4年間のハードワーク部署から輸出課の所属となりました。

## 3. 初めての海外駐在

1976年にジャカルタ支店繊維部に赴任。主な仕事は日本産織物の輸出商売でしたが、過当競争とイ政府の自国産業保護政策等で壊滅状態となりました。特殊糸などの原料商売で食いつなぐ状態が続き、大変な6年半でしたが印象深い滞在でした。この間にインドネシア各地を旅行する機会を得ました。また、特に工場が集中するバンドンには250回以上訪問しました。1979年に始めたゴルフは名門のJakarta golf clubに入会し、25年経過と60歳到達で永久会員となり現在に至っています。

## 4. 二度目のジャカルタ駐在

約3年半の大阪勤務後、合弁会社P.T.Unitex(本社ボゴール)へ役員として赴任し、輸出の拡大に注力しました。お陰で健全な会社になりました。

この滞在中にヨーロッパの各国や国内各地を訪問し、就中特筆すべきは西イリアン訪問です。ワメナは西イリアンの4,000m級の山に囲まれた盆地です。ワメナ空港に降り立つとコテカ(ペニスケース)だけの男性や、腰蓑のみでオッパイ丸出しの女性が普通に歩いていて、まさに石器時代に戻ったようなカルチャーショックを受けました。但し30年前のことで今では様変わりの筈です。

ジャカルタに帰る途中に立ち寄ったビアク島の海岸には上陸用舟艇?の残骸が残っていました。仕事の方は最初の1年は苦しみましたが、その後は好転し、やればやるほど結果が付いてきた滞在中で、思えば長い現役生活の

なかでの黄金時代でした。

## 5. 中国浙江省紹興市駐在

1995年2月、PT Fujitexの副総経理として出向辞令を受けました。丸紅時代にオーナーのTatang氏と面識があり、白羽の矢がたったようです。紹興酒と魯迅で有名な都市ですが、当時はド田舎で日本人駐在員は全部で15人程度でした。紹興市共産党書記長と知り合いになった事が、後日何かにつけて大きな助けとなりました。日本政府援助システムを利用し操業を開始し、顧客は主にドイツ(丸紅経由)中近東(Fujitex経由)やスペイン(直売)でした。「掛け売り一切禁止」方針が焦付きゼロで済みました。経営は順調でしたが予期せぬ雑多な費用請求が来ました。例えば農村教育事業付加金、水利建設基金、シロアリ予防費、緑化保証金など40以上で、中には避妊リング検査費というびっくりものもありました。建設・生産当初は種々の問題に悩み1997/98年の為替危機にも直面しましたが、多くの人から協力を得て任務を全うする事ができました。

6. 辞令を受けて中国紹興市から再度Unitexへ赴任したものの、8年ぶりの会社は実質倒産状態で驚愕しました。主な原因は為替危機下での莫大な為替差損です。こんな状態になるまで放置したその当時の社長や本社には呆れるばかりでしたが、2003年3月末に丸紅/Unitexを退社しました。

## 7. 再度の中国紹興紹欽へ

丸紅退社後、適当な職を探していた所、FujitexのTatang社長から話があり、副総経理として働き始めましたが、暫くして中国側も丸紅サイドも手を引きFujitexの単独経営となりました。なんとか続けていましたが、その後、Fujitex自身も円満撤退を考え始めたようです。撤退理由は国内メーカーの乱立、人件費の高騰、国内同業他社とコスト差等があげられます。結局私自身も退職し、2010年9月に帰国しました。

## 8. 中国国内旅行の思い出

合計10年半にわたる紹興駐在中に機会を捉えては北京、西安、敦煌、九寨溝、海南島他有名な都市をくまなく旅行しました。特に得難い経験した2か所を挙げ



ますと、2006年7月、フランベール大草原を超えて国境の町、満州里に行ったことです。果てしなく広がる大草原、大きなグライ湖、夜空の満天の星は別世界、ロシア風の満州里の街並み、昔の満州国の西端でした。2007年7月の旅ではドンゴル砂漠を横断中に激しい砂嵐に遭遇し、怖かったものの得難い経験です。エチナ近郊では「幻の西夏王国」黒水城のロマンに浸りました。

## 9. 最後の海外駐在 ベトナム、ホーチミン

丸紅退職後はインドネシアやタイでのんびりしていたところ、突然丸紅から合弁縫製工場の退職社長の代役を頼まれてホーチミンのタントアン輸出工業開発区のユニフォーム生産工場行きです。大過なく約1年余を勤め上げて2012年4月末に帰国したのが最後の「宮使い」となりました。

長いようで短かった26年間の海外生活、その間、約20年間の単身赴任は妻にとっては「亭主元気で留守が良い」状態でしたが、更に2015年から長期ビザを取得してタイのチェンマイに年間9か月程度滞在、ゴルフやタイ国内旅行や近隣諸国への旅行を楽しんでいます。普通であったとは言え、長い間受忍してくれた妻に感謝しています。

## 我が交遊録 (ワングル編)

小原 一浩 (1963年卒)



傘寿もとっくに乗り越えた年齢に達した。振り返れば多くの人々と出会いそして別れた。その中で大学ワングル部に所属していた時の友達に思いを馳せてみた。

交遊は入学後の各部のオリエンテーションの場でワングル部に所属したのが始まりであった。部は一年上の先輩の山下氏と加納氏が中心になり創立したものである。仲間の多くは「来年は北海道を目指す」との謳い文句に釣られて入部した。灘高出身の小川君、畝傍高出の小山君、市岡高出身の浦田君、紫野高(京都)の堀田君その他の部員とも新人錬成からその後の長い付き合いが始まった。

それぞれ専攻語は違ったが同じ釜の飯を食った部活動を通じて親しくなり、勉学はそこそこにワングル生活をエンジョイし無事に卒業・就職した。小川君は住友電工、浦田君は日立製作所、堀田君は沖電気へ。ワングル部員は当時学生間で大流行の「麻雀」をする間がなく全員が下手だった。そのお陰で就職後に会社の健康保険組

合を利用して「中国語研修会」を持つ機会を得た。研究会とは「麻雀」の事である。就職後、数年して海外へ赴任する仲間が増えていった。例外は埼玉銀行の小山君で残念ながら若くして逝去。「とらきち」の浦田君は日立製作所のパリへ赴任中に阪神の吉田監督を仏野球へ招くことに尽力し、吉田監督の「私の履歴書」の中でも交流記録が残されている。長くパリの日本人会会長を務め「旭日中受賞」を受けた。帰国後の祝賀会が大阪で開催された時に「勲章」と「賞状」を見せて貰った。



仲間内で勲章を受けたのは彼だけである。小川君は住友電工で、国内営業で活躍。陸上部にも属しスポーツ万能だった堀田君は、入社後は長く海外赴任し、英国・アフリカ等で活躍した。帰国後に取締役として、又、専攻語の南十字星会東京支部長として活躍。後年は房総に別荘を買い大好きな海釣りを楽しんでいた。現在も多くのワングル部員と「たびびと会」で懇親を深めているが、前述の各位は全て「鬼籍」に入ってしまった。一方、宇都宮君、坂口君、島貫君、太田中君、前田君、藪中君、瀧口君等々、専攻語学科同窓生は海外勤務を経験した仲間が多かったのは外大卒のお陰であろう。

人生100年時代と言われている現在、実際はなかなか100歳まで健康で生きながらえるのは難しそうである。

ロシアのウクライナ侵攻、ガザへのイスラエルの空爆、トランプの関税ディール等々想定外の出来事を見聞きしながら地球の無事と世界平和祈っている今日この頃である。

我が人生で出会いそして別れた人達との多くの思い出は例え自身が白骨となっても我が記憶として脳裏に永遠に残り続けるように思えてならない。



# これからも続くインドネシア勤務、カリマンタンへの赴任にあたって

金井 京一 (1987年卒)



1987年卒の金井と申します。私のこれまでのインドネシアにおける経験と今後についてお話させていただきたいと思います。

私は卒業後に最初の会社である自動車メーカーのマツダに就職しました。同社の海外営業本部にて10年間勤務しましたが、最後の3年間はインドネシアの営業担当として1993年から1996年までジャカルタに駐在しました。これが自分にとってのインドネシア勤務の始まりでした。当時は現在の40%程度の自動車市場規模でしたが、政府の提唱する国民車計画を受けて、当社もインドネシア専用車を導入し、拡販に努めました。しかし狙った通りに販売が伸びせず、営業として大変苦勞したことを思い出します。

3年間のインドネシア勤務を経て、縁があって自動車部品メーカーのアイシン高丘に勤務することになりました。本社で3年間勤務の後、同社のインドネシア進出に合わせて2000年から2007年まで2回目のインドネシア勤務を行いました。トヨタGのサプライヤーである当社は、現地アストラGとの合弁でカラワン工業団地に工場を建設し、主に自動車用の製造部品をトヨタさん、ダイハツさん他主要自動車メーカーに供給を行っています。2000年代初頭の自動車市場の拡大による自動車メーカーの増産を受けて、当社も順調に売り上げを伸ばし、現在は当初の4～5倍の規模まで拡張して操業を行っています。実は私はこの現地法人に通算14年間勤務しています。最初の7年間の勤務を終えた後、自身のキャリア後半に入った2018年に3回目のインドネシア勤務の辞令をもらいました。当時のインドネシア法人は急激な生産拡大により管理が追い

付かず、一時業績が悪化していたことや労働組合対応などで現地経験者として再度の赴任の打診がありました。コロナ対応などもあり大変な面はありましたが、何とか乗り切り、現在では当社はアイシン高丘の海外子会社の中でも一目置かれる存在までステータスを上げてきています。私は管理部門であり、生産部隊程の大きな貢献はできていませんが、仕事キャリア38年の約半分、17年をこの国で過ごし、他では得ることがない貴重な経験をさせてもらったインドネシアに今は感謝しかありません。この国は、ここで働いているときは色々大変なことが多いですが、離れるともう一回戻ってきたいと思わせる不思議な魅力があると思います。

そして昨年2024年に私は無事定年を迎えることになり、本来は日本に帰国の予定でした。ところ昨今のカーボンニュートラルの流れを受けて当社に新しいプロジェクトが生まれました。鉄スクラップを溶かして製品を作る鑄造業界において昨今のCO2削減は大きな課題でした。アイシン高丘でも石炭由来の燃料から植物由来の燃料に切り替えてCO2削減することを研究しており、そこで候補に挙げたのが、インドネシアが世界最大の生産国であるアブラヤシの核であるPKSでした。この材料を使った実証実験で100%代替が可能という結果を受けて、すでにプレス発表していますが、CPOメーカーであるトリプトラ社と合弁でカリマンタンのポンティアナックに工場を建設することが決まりました。私もプロジェクトの一員として今年6月から現地へ赴任します。自分にとって本当にタイムリーでまた不思議な縁ですが、更にインドネシアで仕事を続けることになりました。これまで一度も足を踏み入れたことがなかったカリマンタンを今は何度も訪問して準備を進めています。これからどんな生活になるのか未知数ですが、この年になっても新しい挑戦の機会を頂いたことに感謝して、精一杯取り組んでいきたいと考えています。

